

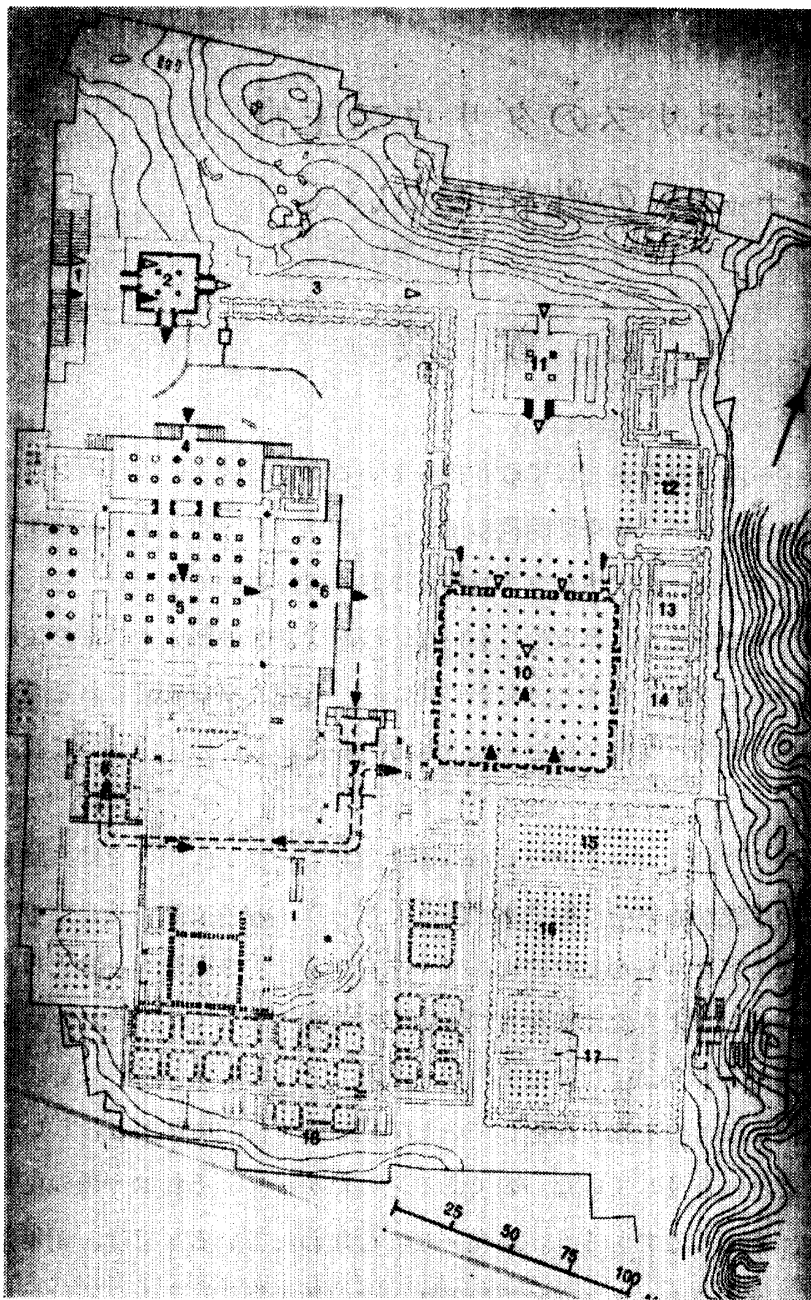
ペルセポリスのダarius王宮^(註1)

(タチャラ)の性格について

伊 藤 義 教

アヴェスターやパフラヴィー語文献を主として取り扱っている筆者には、古代ペルシア語碑文について論を成すの資格もないが、年来疑問視していたパフラヴィー語文献上の問題を解決する必要から、しばらくぶりに、古代ペルシア語碑文に取り組むことになった。それを機会にまとめたものがこの小論であるが、専攻してもいない西南アジアの歴史や美術の領域にもふみこむことになって、いささか、とまどいを感じている。そのような事情もあるので、イランの歴史、美術、考古学、言語、文学などを専攻される方がたから、忌憚のないご教示を仰ぎたいと考えている。

ペルセポリスの建設がダーラヤワウシェ I 世いぜんに構想されていたかについては異論もあるが、同大王によってこの事業が本格的に取りあげられたことは、改めて論ずるまでもない。そして、その建築がほぼ全容をあらわしたのは、アルタクシャサ I 世の時代と考えられている。しかし、この王宮群がどのような性格をもつものであるかについては、それが行政の中枢をなすものではなかったという、はなはだネガティブなことしかわかっていない。それというのも、西欧古典古代にはこの王都が機能していた時期の同時代的情報がとぼしいからで、クテシアスさえも、これに言及していないのである。したがって、それは一種の秘宮に似た面を有していたとも、言いうるであろう。現在一般に行なわれている説では、新年祭の挙行場として大王の勢威を示すにあったとされているが、その新年祭にしても、春分か夏至かについて説が一致していない。この不一致はあるにしても、大王を可動王座にのせてそれを運んでいる浮彫の場面は、新年祭と関連させて、理解しうるものとみられるから、新年祭とこの王宮との関係は、ほぼ肯定してあやまりないものと思われる。こうした想定に基づいて、個々の建物が同祭典にどのような役割を演じたか、貢納者の行列が大王との出会いを、どこで、どのような形でもっていたか、また、その貢納物がどのように処理されていたか、などの点について、諸説がいろいろと提起されている。そうした諸説の一として、しばしば引用される R・ギルシュマン^(註2) (図版 I 参照) の説を要約して示すと、大王と貴族はアパ



図版 I ペルセポリス

- ▶ 大王らの行進路 (ギルシュマンによる)
- ▷ 貢納使節らの行進路 (ギルシュマンによる)
- 2 万国の門
- 5 アパダーナ (ただし、註3参照のこと)
- 7 中央宮 (三門宮, トリピュロン)
- 8 ダーラヤワウシュのタチャラ=アルダスターナ (宝蔵) 宮
- 9 クシャヤールシャーのタチャラ=ハンディシュ (合成) 宮
- 10 (大) 百柱の間 16 九十九柱の間
- 11 未完の大門 17 宝庫
- 15 (小) 百柱の間

(註3)
 ダーナ (5) で会合したうえ、トリピュロン (Tripylon—三門宮) (7) を経てダーラヤワウシュ王宮 (タチャラ—氏はこれを Banquet Hall とよんでいる) (8) に入つて饗宴に臨み、相たずさえて三門宮を経て王座の間 (大百柱の間) (10) に入る。その間に、貢納者たちは万国の門 (2) を経て未完の大門 (11) を通り、王座の間 (10) の北の広場に参進し、一々呼び出されて王座の間に入り、携えてきた献上品を大王の足下に奉呈して退出するが、その献上品は王座の間の南にある宝庫 (17, 16, 15) に収納された、というのである。もっとも、このような手順は、ペルセポリス王宮が全容をととのえてからのことで、それまでには、いくつかの段階があった。アパダーナの完成

はクシャヤールシャー I 世のときであり、王座の間もアルタクシャサ I 世の時代に完成された。万国の門もクシャヤールシャーの造営にかかる。したがって、それらに先きだつ時期においては、手順もかなりちがっていた。宝庫 (17, 16, 15) とよばれるもののうち、九十九柱の間 (16) とよばれるものがダーラヤワウシュによって、外国使節引見の場として急造され、そこで受けとられる献上品は宝庫 (17) に収納されていた。ところが、献上品の増加につれて在来の宝庫 (17) では不足するために、九十九柱の間 (16) も宝庫に転用され、代わって九十九柱の間に北接して小百柱の間 (15) がクシャヤールシャーによって、使節引見の場として造営された。しかし、これもまた九十九柱の間と同じ運命をたどり、あらためて、上記王座の間 (大百柱の間) (10) がつくられるようになった。ギルシュマンの解釈を要約すると、だいたい、このようになるかと思われる。

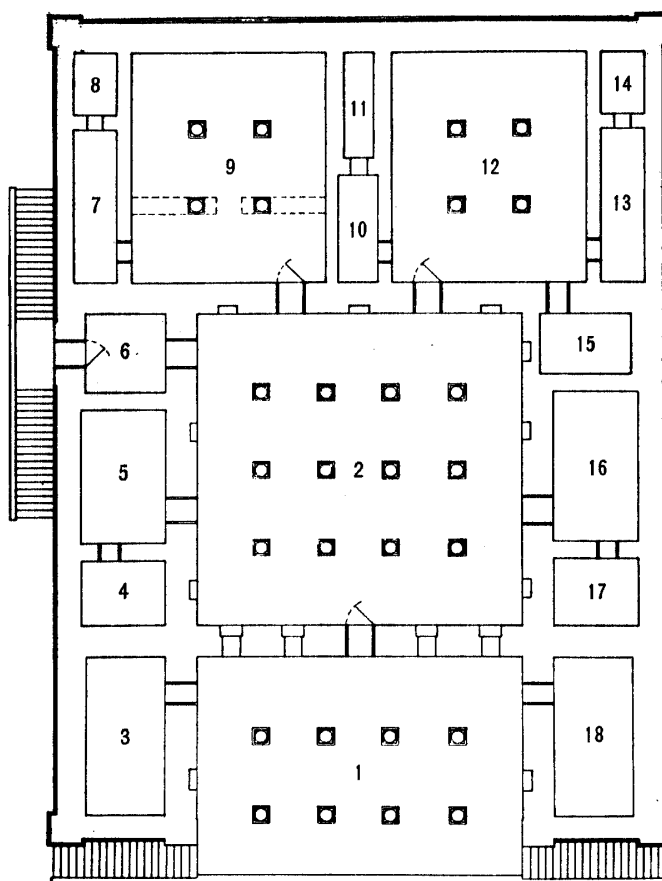
この説を批判したり、別の説を引用したりして、新年祭の行事と建物とのかかわり合いをここで追及することは、本稿の性質からみて好ましくないので、このテーマをこれ以上追うことは、さしひかえることにしたい。というのも、筆者の立場からすると、確実な基盤を設定することが先決問題で、新年祭の行事と建物との関係を論じることは、そのつぎの問題だからである。古代ペルシア語碑文の的確な解読をしないままか、あるいは碑文そのものをまったく読まないまま、考古学や建築学などの立場からなされる議論には、時として再考を要するものもありうるであろう。

まず、本稿の表題についてであるが、タチャラ (^(註 4) *tačara-*) なる古代ペルシア語は、一般に、王宮とか宮殿とかを意味することばとして受けとられているので、しばらくそれに従って「王宮 (タチャラ)」としたが、ただしく定義するなら、単なる王宮や宮殿の意味ではない。スーサのダーラヤワウシュ大王の王宮に ^(註 5) *dačaram* (acc. sg.) なる形がみえるところから、先インド・イラン語とみる学者もあるが、やはり *tačara-* をただしい形とみて語根を *tak-* に求めるべきである。ここまでは一般にみとめられているが、そこからあとが多くの説にわかれている。*tak-* は走る・流れるなどを意味する。そのような *tak-* からの派生形として、*tačara-* は「つらなりあっている部屋をもつ建物」であるとか、「競馬場」であるとか、あるいは「円形炉のある場所」であるなどと解されている。しかし、*tačara-* の構造は現在幹 *tača-* に *-ra* を接辞した形であるから、*tačara-* は行為者名詞であり、それが建物を示す場合には、建物そのものが走るとか、流れるとかの運動・動作に主体的に関与しなければならない。古代語では、このような関係は、おろそかにできないのである。そうした視点から *tačara-* をみると、これは建物自体が走り出るか流れ出るかして建てられているもの、つまり、主要建造物たる本館・本邸があって、それから派生しているものを示すことがわかる。

tačara- とよばれるものは本邸の離れ屋、その別邸・別館である。この意味が理解されるならば、ダーラヤワウシュのタチャラとは中央宮（7）かアパダーナ（5）——アパダーナの完成はクシャヤールシャーのときであるが、起工はダーラヤワウシュのとき——に対するものであることがわかる。中央宮というのは、ヘルツフェルトが三門宮（Tripylon）を命名した建物であるが、最初期にはこの王宮がアパダーナや九十九柱の間、大小百柱の間の機能を兼ねていたものと思われる。この中央宮かアパダーナを **main building** とみて、ダーラヤワウシュのタチャラというのは、その **detached palace** であった。したがって、これらの建物が同時に起工されたとしても、タチャラのほうが論理的には従たる地位にある。また、このタチャラの南東にあるクシャヤールシャーのハンディシュ ^(註4) **Handiš** 宮（9）を検討してみよう。この建物の柱脚の半円形削形（torus）が多数発見されている。発見場所は、いわゆるハレムとよばれる建物の西翼の最西端の数室であるが、これらのトルスはハレムのものではなくて、ハンディシュ宮のものである。しかも、それにみられる碑文（**Xerxes Persepolis** ^(註6) 碑文 j）は、クシャヤールシャーがこのタチャラを建てたと報じている。したがって、このハンディシュ宮もタチャラである。この場合、中心とみるべき建物は、父王の建てた中央宮（7）か、あるいは、父王が起工しクシャヤールシャーみずからが完工したアパダーナかである。このような関係はスーサにも、あてはまる。アルタクシャサⅡ世のスーサ碑文 a ^(註7) (**Artaxšassa II Susa a**) によると、ダーラヤワウシュ大王の建てたアパダーナがアルタクシャサⅠ世のとき焼失したのを、アルタクシャサⅡ世の手で再興したことがわかる。ダーラヤワウシュのダチャラ ^(註5) というのは、この焼失したアパダーナに対するものであった。したがって、スーサの場合は、スーサの「ダーラヤワウシュのタチャラ＝ハンディシュ（合成）宮」というのが正しく、ペルセポリスの場合も、ペルセポリスの「ダーラヤワウシュのタチャラ＝アルダスターナ（宝蔵）宮」（これは本稿で詳しく取り扱う）、同じく「クシャヤールシャーのタチャラ＝ハンディシュ宮」とよぶのが正しい。ペルセポリスの場合、これまでのように、タチャラをダーラヤワウシュの王宮にのみ用い、クシャヤールシャーのそれには「クシャヤールシャーのハディシュ（今やハンディシュ）」という呼称を用いるのは、片手落ちである。クシャヤールシャーには、このほか、ペルセポリス基壇の南 500 m にもタチャラ（十二柱の間）が1951年に発見されている。これも、ペルセポリス基壇を中心とみれば、まさしく「離れ」である。近世ペルシア語では、*tazar* (<*tačara*-) は **summer house** となっているが、夏場の居住用として、常住の本邸から離れて建つものであるから、意味のうえで問題視する要もない。

こうした取り扱いから、論考の筋が、おのずと、ダーラヤワウシュのタチャラ宮に及んだ。

ギルシュマンは、上説したように、Banquet Hall とよんでいるが、この建物の機能については、王の private palace などといった程度のもので、あまりポジティブな議論はなされていない。これは、ペルセポリスの遺構中、荒廃度のもっとも少ないもので、原型を復原するのに大きな困難がなく、この点でも古くから注目をひいた。図版Ⅱは E. F. Schmidt: *Persepolis I* ^(註8) によった復原平面図（部屋の番号は同書の説明にもとづいて筆者の加筆したもの）で、同じくⅢは M. Dieulafoy: *L'art antique de la Perse*, III, Paris 1885, Pl. VII の推定復原図である（註10も参照のこと）。現状は、柱・屋根（天井）（いずれも木製だった）はなく、また壁体充填用の土煉瓦も崩壊し去って、石造りの用門（室か

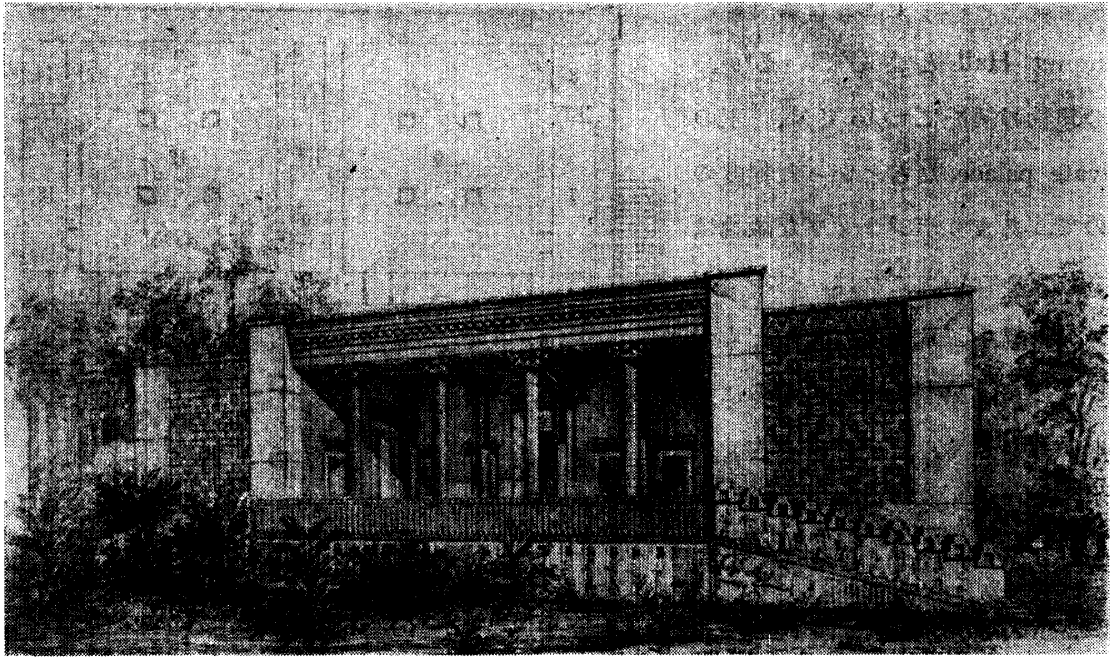


図版Ⅱ ダーラヤワウシュのアルダスターナ（宝蔵）宮の推定平面図

番号はシュミットによったが、本論稿では 1, 2, ……とよばずに、とくに No. をつけて No.1, No.2, ……とよぶことにする。

ら室へ通じるもの）、同じく窓枠およびニッチ（niche—壁龕）をのこしているのみ。用門は、図面の示すように、いくつかあるが、柱廊（No. 1）からメーンホール（No. 2）に通じるもののみが碑文（Darius Persepolis a, その他）^(註9)を有する。窓枠は、この正面用門の両側に2基ずつ、計4基^(註10)を数え、もとは各窓とも木製のシャッターをそなえていたと思われる。ニッチは全部で10基——内訳は、柱廊（No. 1）の東西両壁におのおの1基（計2基）、メーンホール（No. 2）の北壁と東壁にそれぞれ3基、そして西壁に2基である。ニッチは箱のふたのような形のものです、くぼんでいるが、窓枠と異なり光を通すことはない。

これらのものを残しているこの建物は、上記 Darius Persepolis 碑文 a によって、ダーラヤワウシュ大王の造営したタチャラ宮であることがわかるが、それにもまして重要な碑文は Darius Persepolis 碑文 c である。この碑文も、例のごとく、古代ペルシア、エラム、アッカドの3語版から成っているが、4窓と10ニッチ^{ふち}に縁取りのように、 形に付刻され、し^(註11)



図版Ⅲ ダーラヤワウシュのアルダスターナ（宝蔵）宮の推定復原図
デュラフォアによった。正面柱廊を中心とした景観。

かも各窓には内外（北南）両面にそれが見られるので、碑文cは、けっきょく、18回（窓に $2 \times 4 = 8$ 回，ニッチに 10 回），同文のものが繰り返えされていることになる。左側には下から上へエラム語，上部には水平に左から右へ古代ペルシア語，右側には上から下へアッカド語版が，いずれも 1 行にしるされている。テキストを示すと，つぎのごとくである。

Elam. *har-da-iš-da-na - Har^{id}-in-na 'da-ri-ja-ma-u-iš 'sunkuk - uelmannu^{id}-e-ma hu-ut-tuk-ka*

O. Pers. *ardastāna aθa^againa Dārayavahauš xšāyaθiyahyā viθiyā karta*

Akkad. *ku-bu-ur-ri-e aban ga-la-la i-na bi-it 'da-a-ri-ja-a-muš šar-ri ip-šú'*

ヨーロッパでこの碑文に特別な関心をよせた最初のひとは，おそらくシャルダンであろう。彼は A. D. 1666 について，1674 にもペルセポリスを再訪して詳報を提供しているが，彼のペルシア紀行の図版 LXIX はこの碑文を示している。^(註12)これにつづく古いものでは E. Kämpfer^(註13) や C. de Bruin^(註14) などがあるが，解読までにはまだ 1 世紀半ばかりを待たねばならなかった。古代ペルシア語版は「ダーラヤワウシュ王の（王）宮につくられた石（づくり）の *ardastāna*」と謳っている。*ardastāna* なるよみかたの正しいことは，エラム語版の *har-da-iš-da-na* から確認される。エラム表記 *-šd-* (*-iš-da-*) は，一般に古代ペルシア語

(以下しばしば O. P. と略記) 音 *-št-*, 時には *-šd-* をあらわすが、^(註15) O. P. *-st-* をも示すことができるからである。そこで、^(註16) O. P. 版とエラム語版とは、*ardastāna-* を解明すれば、ほかに問題はないことになる。

O. P. *ardastāna-* は、だいたいにおいて、「窓枠」という意味で理解され、これに見合うように、種々な語原が提示されている。ここでは、それらを年代順に挙げて批判することからはじめよう。

(1) Chr. Bartholomae: *Altiranisches Wörterbuch* (以下 *Air Wb.* と略記), Strassburg 1904, col. 193 は *arda-* を Av. *arəda-* “halb” (Ind. *ardhā-*) とむすびつけて、*ardastāna-* を Halbstand, vielleicht Fensterkrönung od. -sims と解している。「半分で在るもの (Halbstand)」というのは、窓枠のタテの寸法が、用門のそれに比して、半分ぐらいしかないことから出た解釈であろう。あるいは「半立ち」といってもよいかもしれない。しかし、そういう意味の合成詞は、*-stāna* でなく、*-stā* (Ind. *-sthā*) かその derivative *-stāt*, *-stāti* (Ind. では *-sthiti*, *-sthiti* が対応する) で終わるのが通則である。Halbstand ならば、動詞前接辞と *-stā* との合成詞とみられるから、*paiti-stā* 「田宅」、*upa-stā* 「援助」(cf. Ind. *pratiṣṭhā-*, *viṣṭhā-*) のごとき構成をもつ行為名詞でなければならない。これにたいし、*-stāna* で終わる 2 幹合成詞は「前肢の示すものの所在するところ」を意味する、例えば Av. *gaostāna-* 「牛舎 (牛のいるところ)」, *aspō.stāna-* 「うまや」、*uštrō.stāna-* 「ラクダ舎」のごとくである。したがって、バルトロメー説は成立しがたい。

(2) E. Herzfeld: *Altpersische Inschriften*, Berlin 1938, pp. 74-76 は *ardastāna-* “ὀρθοστάτην” と解し、*ārda-* を Av. *arəδwa-*, *arəδva-* “auf—, nach oben—, in die Höhe gerichtet” (*Air Wb.* 350) (cf. Ind. *ūrdhvā-*) とむすびつけた。*ὀρθοστάτην* は「高く立っているもの」一般を示し、また「柱」をも示すが、ヘルツフェルトは、おそらく、Torturm 「門塔」を意味したのであろう。しかし、*ārda-* と *arəδwa-*, *arəδva-* とのむすびつきはともかくとして、*-stāna* 合成詞にたいする氏の解釈はバルトロメーと同じ過誤を犯している。他の諸氏と異なり、ヘルツフェルトはアッカド語訳 *ku-bu-ur-ri-e* すなわち *kuburrē* をとりあげて、その語根 *KBR* 「大きくなる」に言及している点はすぐれているが、*KBR > kuburrē* (*kuburru*) の語解を誤っているのは惜しい。この語については、あとで取り扱うことにする (p. 11 以下参照)。——ところで、このヘルツフェルトは、のちに、その著 *Zoroaster and his World*, Princeton 1947, p. 684 で *ardastāna-* “frame, corner-pillar” なる別の解釈を打ち出した。このために、氏は

kuburrē の語根として、*KBR*「大きくなる」とは別の*KBR* “*ḥplē*”「制約する、枠づける」なるものを措定したが、これは恣意的である。氏は *arda-* の語原としては、おそらく、*Av. arəda-* “Seite” (*Air Wb.* 193) (*Ind. ārdha-*) を考えたのであろうが、*-stāna* 合成詞への理解がまちがっている点は、依然として改まっていない。

(3) R. G. Kent: *Old Persian*, New Haven 1953 (2nd and revised ed.), pp. 16, 53, 171 は *arda-* を「光」の意味に解し、*ardastāna-* を “light-place, place of light, i. e. window-frame or -cornice” と説明した。この見解は、*-stāna* 合成詞への解釈を誤っていない点では、これまでのものに比して、すぐれているが、*arda-* が「光」を意味するとなす点は首肯しがたいし、また、光を通さないニッチはどう取り扱えばよいのであろうか。Kent は *O. P. ardata-* = *Av. arəzata-* 「銀」 (*Air Wb.* 352), *Ind. rajatā-* “white; silver” から *arda-* 「光」なるものを措定するが、*Av. raočana-*, *Pahl. rōzan*, *N. P. rūzan* 「窓」からみて、*O. P.* としては **raučana-* 「窓」をまず考えるべきか、それとも、**raučana-* を element とするなんらかの合成詞を「窓枠」に措定すべきであろう——もっとも、*O. P. raučah-*, *Pahl. rōz*, *N. P. rūz* は “day” を意味するが。

(4) W. B. Henning は、M. Mayrhofer: *Das Altpersische seit 1964* (*W. B. Henning Memorial Volume*, London 1970 所収), p. 284 によると、*Numismatic Chronicle*, 6th Series, XVI, 1956, p. 328 and note 1 において、*O. P. ardastāna-* > **āl-stān* > *N. P. astān(e)* “threshold, sill” と解し、*ardastāna- aθa* “gaina-” を “stone sill” と訳したとのことである。Mayrhofer は I. Gershevitch から通報されて、この解釈を ein entscheidender Fund と称しているが、*ardastāna-* は *alestān* (本稿 p. 15 参照。*N. P.* も理論上は同形のはず) とはなっても *astān* とはならないし、*O. P. arda-* の語義も示されず、また、*-stāna* 合成詞にたいする解釈も賛しがたい。Mayrhofer の立場については p. 9 をも参照されたい。

(5) W. Wüst: *Altpersische Studien*, München 1966, p. 22 は *ardastāna-* を **arda-stūnā-stāna-* “Halb-Säulen-Stand” すなわち「(長さ) 半分の柱で立っているもの」の haplology とみて、そこから「窓枠」の意味を得ようとした。しかし、*stūnā-* を補って **arda-stūnā-stāna-* とすれば、もはや、それは Halb-Säulen-Stand とは訳することができず、Stätte wo Halb-Säulen gefunden sind でしかありえない。このような意味から窓枠の意味を引き出すことのむずかしさは、Halbstand の場合と同様で、写真をもって牽強附会的に説明して納得を求める以外に方法がない。

以上、いずれも、根本的な難点を有していることがわかるが、これらに共通した立場とし

て、もうひとつ看過しがたい点がある。それは、いずれも、*ardastāna-*を建築用語として
 ることである。この建物には、上述したように、南面に4窓があり、その各窓には南北両
 面に銘文が造刻されている。窓を取り入れた建築として、このタチャラ宮はイラン建築史上
 注目すべきものとされており、そういうところからも、*ardastāna-*を建築用語とみる伝統
 (?)が生じ、まだそこから抜け出せないのであろう。南窓に惹かれて、このタチャラ宮
 をWinter-Palace と称するひともある。^(註17) M. Mayrhofer: *Handbuch des Altpersischen*,
 Wiesbaden 1964, Lexikon, p. 104 にも

ardastāna- m. Terminus der Baukunst, 'Fenstergebäude, Steinquader mit Fenster-
 öffnung'Etymologisch sicher ist nur *stāna-* als zweites Glied;

とあるほどである。*arda-* は不明で *stāna-* しかわからないが、建築用語で「窓様の構造、
 窓を削りぬいた切石づくり」であるというのである。上記したように (p. 8), 氏はその後
 Henning の *ardastāna-* “sill” 説を決定的なものとしているが、O. P. *arda-* が不明であ
 ることは、依然として、同じではないか。A. Meillet et É. Benveniste: *Grammaire du*
Vieux Perse, Paris 1931, § 293 “montant de fenêtre (?)”, § 387 “corniche (?)” には
 建築用語だとの明言のないのはさすがであるが、*arda-* の語義不明のため、在来の説を疑問
 視しながら紹介するにとどめている。

では、*ardastāna-* はいかなる意味であろうか。これまでの取り扱いで確実にになったこと
 は、*ardastāna-* とは「*arda-* の在るところ」という意味であるから、*arda-* さえ説明すれば
 よいことになる。筆者によれば、*arda-* は「繁栄、財宝、富」などを意味し、語根は *ard-*
 「増大する、栄える、富む」である。*ard-* (*arad-*) は Ind. *ṛdh-* と同じものであるが、古
 代イラン語として実際に在証される形は、いずれも、それが自動詞であることを示している。
 定動詞形 (*verbum finitum*) としては、アヴェスターの Yasna 50₁₁ に *aradat* が指摘され
 るだけである。

c *dātā aṇhəuš aradat vohū manayhā*

d *haiθyāvarəštəm hyaṭ vasnā fərəšōtəməm*

その御意のなかにあつて最第一なるものを、ウォフ・マナフを通して

実現し給うために、世の創造主が富み栄え給わんことを。

筆者も、この句の解釈には、十全でなかった。これまでのどの訳をみても、*aradat* は他動
 詞、その目的語は *haiθyāvarəštəm* とされている。しかし、*haiθyāvarəštəm* は *-tā* に終わ
 る女性詞の acc. sg. ではなくて、絶対不定詞 (*absolute infinitive*) 「実現するために」であ
 る。*aradat* は語根アオリスト仮定法3人称単数で、意味は「富み栄え給うように」。世を正

善界にするために、アフラ・マズダーが富み栄え給えと願われるのは、この神によって天国の資産 (*išti-*) が有資格者に約束され、かれがそれによって富者 (福者 *aradra-*) となり、天国に迎えられようになることを目的としたものである。この *išti-* を有するアフラ・マズダー自身も、したがって、富者 (福者) である。信者救済のために、神がますます富み栄えんことを願われるのは、このような事情を背景として理解するべきである。このことについては、拙稿 *Gathica VII aradra-* (*Orient* vol. 6 所収) を参照願いたい。 *aradat haiθyāvarəštqm* は「……の実現を促進し給わんことを」ではない。 *Av. ard-* (*arad-*) には、このほか、派生形として、分詞やその他のものが 2, 3 指摘される。列举すると：

(1) *Ērədat.fəδrt-* ——これは第3サオシュヤント *Astvāt.ərəta-* の母の名で *Yašt* 13₁₄₂ に見え、**arədat.pitar-* 「栄えている父をもつもの」の女性形。 *Air Wb.* 350 “die dem Vater Gedeihen schafft” 以下、これまでの諸訳は、みな贅しがたい。 *Pahlavi* 語訳では *Gōbāg-pid* となっているが、アヴェスター語形と意味は同じである。 *gōbāg* の正確な訳は示されていないが、H. W. Bailey: *Zoroastrian Problems in the Ninth-century Books*, Oxford 1943, p. 83 によって、この *gōbāg* は的確に解明された (M. Molé: *La légende de Zoroastre selon les textes pehlevi*, Paris 1967, p. 229, n. 15 をも参照)。

(2) *arəδwan-* adj. 「富める、栄えている」 ——これは *Yašt* 10₁₂₀ にミスラ神を形容する語として用いられている。 *Air Wb.* 350 “der gedeihen lässt, fördert” や I. Gershevitch: *The Avestan Hymn to Mithra*, Cambridge 1959, pp. 132-33: “furtherer” ではなく、*Yt.* 10₁₂₀: *Miθrō vīspā mazdayasnanqm yqm ašaonqm arəδwā* は「ミスラは、義者なるすべてのマズダヤスナ者たちのなかで富み栄えているもの」でなければならぬ。

(3) *arəδwō.biš-* adj. 「多くのものを癒やす」 ——前肢は(2)で扱った *arəδwan-* と同じであるが、ここでは “abundant” の意味。 *-biš* 合成詞の意味については、*Yasna* 44₁₆ の *ahūm.biš-* 「世を癒やすもの」を参照したい。 *Yašt* 12₁₇ に霊木 *Višpō.biš-* (「すべてを癒やすもの」の謂) を描写して *avqm vanqm...yā hubiš arəδwō.biš yā vaoče Višpō.biš nqma* 「よく癒やし、多くのものを癒やし、*Višpō.biš-* の名でよばれている、かの木」とある。 *hubiš-* は *Air Wb.* 1829 “der gute Heilmittel hat” ではなく、*arəδwō.biš-* も *Air Wb.* 351 “der energische, kräftige Heilmittel hat” や J. Duchesne-Guillemin: *Les composés de l’Avesta*, Liège-Paris 1936, § 201, 19 (p. 158) “aux remèdes efficaces” ではなく、*Višpō.biš-* も *Air Wb.* 1469 “der alle Heilmittel hat” や J. Duchesne-Guillemin: *op. cit.*, § 103 (p. 71), § 201, 71 (p. 164) “qui a tous les remèdes” ではない。É. Benveniste: *Notes Sogdiennes* (*Bulletin of the School of Oriental Studies* 9 [1937-39]), p. 506 は *vīspō.biš-*

を “qui guérit tout” と正しく解している。ここに登場した3個の *-biš* 合成詞の前肢 *hu-*, *aradwō-*, *vispō-* は、動詞 *ard-* (*arad-*) が自動詞であることを明示している。

上例中、(1) **aradat.pitar-* (>f. *aradat.fadri-*) は Vedic に類形を有する。^(註18) *rdhād-rā-* 「ゆたかな速さをもつもの」と *rdhād-vāra-* 「ゆたかな富をもつもの」がそれぞれであるが、このほか *Śatapatha Br.* には *ardhuka-* adj. “prospering” がある。この *ardhuka-* から Ind. **ardha-* 「富、栄え、財宝」を逆推措定することができる。すなわち、*bhā->bhāvuka-: bhāva- / vid- “to find”>véduka-: veda- / naš- “to disappear”>nāšuka-: nāša- / kam->kāmuka-: kāma-* などに準じて、*rdh->ardhuka-: *ardha-* を措定しうるのである。もっとも、このような逆コースからでなくても、*arda-: Ind. *ardha-* は容易に得られる。ただし、*ard-* (*rd-*): *rdh-* からの *arda-: *ardha-* なる derivation はきわめて普通だからで、実例ははなはだ多い：*vid- “to find”>Av. vaēda- m. “finding”: Ind. veda- m. “ditto” / i- “to go”>Av. aya- m. “going”: Ind. áya- m. “ditto” / Av. diz-: Ind. diḥ->Av. daēza- m. “mound”: Ind. deha- m. “body” / Av. guš- to hear: Ind. ghuš- “to cry aloud”>Av. gaoša- m., O. P. gauša- m. “ear”: Ind. ghóša- m. “noise” / etc. のごとし。それゆえに、*ardastāna-* の *arda-* は *ard-* (*arad-*) からの派生詞として「財宝、富、栄え」などを意味することは、いまや確実となった。したがって、*ardastāna-* とは「財宝の在る場所、宝蔵、宝庫」の意味で、*Ardastāna* とはダーラヤワウシュ大王が、そのタチャラ宮を、用途に即して命名した名称である。従来のように、「窓枠」などの意味ではなく、まして「窓」などでは断じてない。常識からでもわかるうではないか。窓枠・窓枠などと、窓やニッチにひとつひとつ彫りつけるなどとは、考えられないことである。上に展開した議論も、学問などという大仰なものではなく、常識上おかしいことを常識的におかしくないようにしただけのことである。*

さて、常識論が出たついでに、こんどはアッカド語版を取りあげてみよう。これも常識的に考えれば、きわめて自然な解決のつく問題である。テキストは p. 6 に示した。通用語形に翻ずると、*kuburrē aban galāla ina bit Dāreyavōš šarri ipšuw* で、意味は古代ペルシア語版と同じである。強いて異を求めるとすれば、O. P. では *ardastāna aḥa^againa* 「石（づくり）の宝庫」とあるのにたいし、アッカド語版では *kuburrē aban galāla* 「研磨された石 (*aban galāla*) (づくり) の宝庫」とあって、O. P. 版と異なり、石材の処理を明らかにしている点であろう。このタチャラ宮が Hall of Mirrors とよばれるのも、もっともである。ところで、問題は *kuburrē* である。結論をさきに出して、「宝庫」と訳しておいたが、*kuburrē* は *kuburrum* の後期の形であるから、以下 *kuburrum* を多く用いて論をすす

めてゆこう。これについては、上説 p. 7 でヘルツフェルトの説を紹介するときに、一部触れるところがあった。語根は *KBR* または *kabarum* 「大きい、大きくなる」で、*kuburru* はこれからの派生形 *puruss* タイプである。「大きくなる」とは *ard-* (*arad-*): Ind. *ṛdh-* とまったく同一の概念であるから、この動詞からの派生形 *kuburru* が *ardastāna-* の訳語にえらばれたのは、至極当然である。アッカド語としては、*puruss* タイプの派生形は、W. von Soden^(註20) も指摘しているように、普通に見うけられるが、*kuburru* そのものは稀れで、在証テキストも後期のものに属する。Thureau-Dangin は *Clay: Babylonian Records II*, n. 30 および 44 にみえるセレウコス朝代のテキストを引いて、そこに出る *kuburru* がもっともよくその語義を伺わせるものと言っている。筆者はその原典に接近できないので、E. Herzfeld: *Altp. Inschriften* p. 76 を引いてみよう：

Alle andren gottheiten treten in den tempel ein, aber Papsukkal dans le kuburru de la porte du sanctuaire s'arrêtera.

とある。Papsukkal の像は、他の神々の像のように、神殿のなかにははいらずに、神殿の用門のところの *kuburru* のなかに留めおかれることを述べたものである。この *kuburru*こそ、まさしく収納庫であり宝庫である。ところが、ヘルツフェルトは、この *kuburru*こそ O. P. *ardastāna-* “*ὀρθοστάτη*” にあたるものと言っているが、大なる誤解である。氏は、この解釈——誤っているために、みずからも納得しかねたのであろう——に飽きたらなかつたらしく、のちに、*KBR* 「制約する」なる語根を措定までして *ardastāna-* “*frame, corner-pillar*” を提唱した (p. 8 参照) が、解明どころではなく、これでは冥より出でて冥に入るのみ。ところが、登高一呼万山皆応というか、ヘルツフェルトの説 (*ardastāna-* “*ὀρθοστάτη*”) はそのまま無批判にうけつがれ、B. Meissner und W. von Soden: *Akkadisches Handwörterbuch*, Band I, A-L, Wiesbaden 1965, p. 498 にはヘルツフェルトを引いて、*kuburrû* “‘Torturm’ (ap. *ardastāna*) aus Quadern” と説明している。筆者によれば、*kuburru* を正しく解釈すれば、O. P. *ardastāna aḥa"gaina* からでも、Akkad. *kuburrē aban galāla* からでも、*ardastāna-* が宝庫の意味であることを解明しうるはずである。あるいは、*aḥa"gaina-* よりも *aban galāla* とあるアッカド語訳のほうが、解明には、むしろ、まさっているかもしれない。

このようにして、*ardastāna=kuburru* が「宝庫」であることを明らかにしたが、これまでの筆者による取り扱いは、もっぱら、言語の面に集中された。そこで、これからは、この成果をタチャラ宮の構造の面から検討してみることにしたい。この王宮は間口 30 m, 奥行 40 m, 広さ 1200 m² であるから、アパダーナ (5) の 60 m×60 m, 王座の間 (10) の

70 m×70 m にくらべると、はるかに小さい。それが、図版Ⅱでもわかるように、18 のスペースに区切られている。柱廊 (No. 1) はここでは問題外として除くが、それでも 17 のスペースがある。このように多くのスペースを有していること自体が宝庫たる性質にふさわしい。そして、これらのうち、「宝庫」の刻銘をもつニッチの背後の部屋は、実に 10 室 (No. 10 室の背後に隣接する No. 11 室を加えると 11 室) をかぞえる。このことは、その各部屋が、それぞれ、小「宝庫」であることを示唆する。このニッチと関係のない部屋はガードマンやサーヴァントの部屋とみることができる。こうして、いくつかの小「宝庫」が集まって、タチャラ宮全体をひとつの「宝庫」——大「宝庫」に盛りあげる。タチャラ宮そのものが「宝庫」であることを示唆するものは、メインホール (No. 2) の 4 窓が内外両面に「宝庫」の銘文を有することである (上記 p. 6)。建物の用途に応じてそれに命名する例は他所にもあり、例えばアルシャク朝の首都 Nisā (Aškābad の北西 18 km) の Mīhrdātkirt の酒庫が Madustān (<madu-stāna-「酒の在るところ」) といわれていたのも同様である。タチャラ宮のなかで、北東の小ホール (No. 12) は、これに通じる用門の浮彫りから、大王の私用にあてられていたことがわかる。No. 12 室から No. 10 室に通じる用門の柱には化粧瓶とタオルをもつ無鬚の従者 1 人、No. 12→No. 13 ならびに No. 12→No. 15 のそれにはいずれも、化粧瓶とタオルをもつ従者 1 人と香盒と手桶をもつ従者 1 人、そして、No. 12→No. 2 のそれには大王と 2 従者が、それぞれ、浮彫りされている。ところが、No. 12 室はニッチの背後にあるので小「宝庫」であることが示唆されるから、宝庫と大王の居室とが競合することになる。しかし、これは必ずしも相容れないものではない。Av. *garō dāmāna-* はアフラ・マズダーの止住する最勝界であるが、*gar-* の語原的取り扱いのいかんにかかわらず、そこはアフラ・マズダーの資産 (*išti-*, 上説 p. 10 参照) ——これは浄土教に説く阿弥陀仏の功德に比較される——のみならず、人間の行じる善悪行がすべて集積される所である (Yasna 45₈, 49₁₀, 50₄, 51₁₅)。この *garō dāmāna-* が東イランのカウイ王国の宝庫に範をとったものかどうかは不明であるから、ポジティブには論議できないにしても、タチャラ宮の No. 12 室が宝庫と居室とを兼ねても不思議はなかろう。ただ、残念なことには、メインホール (No. 2) がどのように機能していたかについては、推論の手掛かりがない。といっても、宝庫としての役割と無関係でなければならぬことはなく、例えば、献上品をここに展示して大王の高覧に供することも考えられる。ギルシュマンの言う饗宴の開催もポジティブには否定もできないが、開催されたとしても、そのことがこのタチャラ宮の名称 *Ardastāna* の意味を動かすことはできないであろう。それだけでなく、柱廊へ昇降する南の東西両石階の扶壁 (*parapet*) の両面 (北面と南面) や、石階に垂直の北壁面 (切石積みでできているタチャラ

基壇の南面)にも注目すべき人物の群像がみえる。^(註21)かれらは「万国の門」(2)を経て参進した貢納者ではなく、大王の下僕として、貢納者たちの献上品を——中央宮(7)からであろう——このタチャラ＝アルダスターナ宮に移し入れる召使たちとみることができる。かれらが搬入する品目は、必ずしも事実を表象したものとみななければならぬことはない。シンボライズしたもの、あるいは様式化されたものとみることも可能であろう。これと類似の人物群像は、中央宮の南の東西両石階の扶壁にもみられる(E. F. Schmidt の上掲書、図版85, 86)。しかし、アルダスターナ宮の場合は正面石階に彫刻されているのに対し、中央宮では、いわば、裏口の階段ともいべき場所である。人物が下から上に向かって行進するように表わされているのはアルダスターナ宮と同じであるから、中央宮に搬入する場面と解されるが、もし、この進行方向は様式化されたもので必ずしも事実を表象したものでないともみることが許されるならば、中央宮から搬出する場面とみることができよう。そうすれば、この場面は、そのままアルダスターナ宮正面石階の搬入場面に接続することになる。つまり、中央宮で大王に捧呈された献上品は、この裏口階段を経て、アルダスターナ(宝蔵)宮に運びいれたということになる。筆者には、タチャラ王宮の構造面からは、これだけのデータしか引き出せないが、中央宮裏口階段の群像にたいする解釈の当否は別としても、以上の所論で筆者の主張を裏づけるには事足るであろう。このタチャラ＝アルダスターナ(宝蔵)宮の柱廊の両外端の壁柱(anta)や南石階(正面)のファサードに、クシャヤールシャーは

アウラマズダーの御意により、このハンディシュを、余の父、王ダーラヤワウシュが造営した

と追刻している(Xerxes Persepolis 碑文cの一部)。しかし、この「ハンディシュ」は建物の構造面から来た用語であるから、「アルダスターナ」という、建物の機能面からする用語と矛盾することはない。

最後に、筆者は、ゾロアストラ教聖典の歴史を取り扱っている同教徒の伝承からみても、筆者が上に展開した所論の誤っていないことを確かめて、この小論を結びたい。パフラヴィー語書 Dēnkard には、聖典の歴史を取り扱ったいくつかの記載がみられる。^(註22)DkD. 512 [320]₁₆=DkM. 411₁₇ 以下や、^(註23)DkD. 516 [316]₉=DkM. 405₁₁ 以下も、それぞれ、そのひとつである。ここでは、まず前者からは、サーサーン朝王シャープフル I 世の業績を伝える部分(DkD. 511₁₃₋₂₀=DkM. 412₁₇₋₄₁₃₂)のみをとりあげ、そのあとで(p. 17 以下)後者からイスラム時代の記載(DkD. 515₅₋₂₁=DkM. 406₁₀₋₄₀₇₉)を援用して補足することにしたい。まず、DkD. 511₁₃₋₂₀=DkM. 412₁₇₋₄₁₃₂ の記載を見よう。

Šābuhr i 'šahan 'šah i Ardashērān nibēgthā-iz i 'az dēn 'bē 'abar bizeškth ud

アルダクシェール（Ⅰ世）の子、大王シャープフル（Ⅰ世）は（ゾロアストラ）教に由来し、医学と天文学、運動と時間、空間、実体、創造、発生、破壊、法学と文法学およびその他の学術や技術に関するもの（文書）で、インド、ビザンツおよびその他の諸地域に散在していた文書をも集めて、アヴェスター（アベスターグ）とふたたび合併した、そしてその正しい写しを全部、かのシーズの宝庫（*Ganj i Šizigān*）に保管することを命じ、またマズダヤスナ教（ゾロアストラ教）に関する総合宝庫（*hamāg ardestān*）の設立を検討した。

— 15 —

言的取り扱いをまぬがれたであろうとするもので、そういうところから *alestān* を排して *ardestān* をとった。ただし、シャープフル I 世が設立を検討したとされる「ゾロアストラ教に関する総合宝庫」が陽の目をみたかどうかは、明らかでない。それに、この表現——「総合宝庫の設立」(*astēnidan i hamāg ardestān*)——が、シャープフル I 世の当時、すでに荒廃していたはずの *Ardastāna* 宮を修復することを意味するのか、あるいは、別に宝庫を新設することを意味するのか、その辺のことも、いささか鮮明を欠く。もし新設することとすれば、そして、もし実際にそのことが行なわれたとすれば、どの地をえらんでなされたのであろうか。*Nā'in* の北西 100 km ばかりにある *Ardestān* は、その都市名からでは、好個の地であるが、この町とシャープフル I 世との関係に言及したアラブやペルシアの史家や地理学者を筆者は知らないのである。*Ardestān* はパルティア語域にあるから、地名にその方言形をとどめているのは論じるまでもない。こうした一連の不明な要素はあるが、*hamāg ardestān 'abar dēn mązdēs* 「ゾロアストラ教に関する総合宝庫」なる解説は、異論の余地をのこさないものとなった。シャープフル I 世は、おそらく、そのなかに聖典をはじめとする種々のものを収納するつもりであったに相違ない。そして、このことから逆推してタチャラ＝アルダスターナ宮の場合を考えると、浮彫りそのものからは文書の保管は考えにくい、重要文書保管の可能性が皆無ともいえないであろう。ゾロアストラ教徒はかれらの聖典の歴史を取り扱うにあたって、*Diz i Nibišt* 「記録の城」(文庫)にあったその聖典がアレクサンドロス大王によって焼かれたことを、繰りかえし謳っている。文字の歴史からみて、このような時期に聖典文書があったとは考えにくいとして、これをゾロアストラ教徒のフィクションとする考えかたが行われている。しかし、教徒の所伝を正しいとすれば、その文庫は、おそらく、ぜんじ拡充整備されていった、かのいわゆる宝庫 (17, 16, 15) であったかもしれない。しかし、最初期の交に想到すれば、*Ardastāna* 宮にもなんらかの文書(ゾ教聖典でなくても)が、短期間ではあっても、おかれたと考えられないこともない。

ardastāna→*ardestān* (*alestān*) は、中世語を最後に、廃用されたようである。これはメディア語 *ganza* がはやくから競合したため、*ganza*→*ganj* は “treasure; treasury” の意味で、オリエントにひろく通用した。*Dēnkard* にみえる上掲 *Ganj i Šizigān* 「シーズの宝庫」(在メディア) もそれであるし、旧約聖書やマンダ教聖典にも借用されている。ニサー出土のオストラコン No. 2107 (B. C. 39 の日付あり) にも *GNZ' MLK'* 「王の宝庫」がみえる。ニサーの文書は、さらに、音位の転換をしめす *GZN* ^(註28) をも有するが、これを地名に伝えているものに *Gazneh* のあるのは人の知るところ。

この *ganza*→*ganj* とならんで、しばしば用いられるものに *dīwān* がある。*dīwān* は

**dīpīpāna*-「文書 (*dīpi*-) の保管所」の *hopology* で、語原からみても、*diz i nibišt* と並び存する本格的な、「文庫」を意味する語である。アラブのイラン侵入後における、ゾロアストラ教聖典の歴史をつたえる一節 (p. 14 参照——DkD. 515₅₋₂₁=DkM. 406₁₀₋₄₀₇) にも、*dīwān ud ganj*「文庫と宝庫」という表現や *hamāg dīwān*「総合文庫」なる語がみえる。*hamāg dīwān* というのは、写本にある *hmyh dīwān* すなわち *hamīh dīwān* を筆者が改読したものであるが、この改読はなんら恣意的なものではなく、したがって、*hamāg ardestān*「総合宝庫」とパラレルに理解することができ、これを逆にいえば、*hamāg ardestān*「総合宝庫」なる筆者による解読は、この *hamāg dīwān*「総合文庫」によって、その正しいことを立証されることになる。両施設が、いずれも、ゾロアストラ教聖典に関連していることを、とくに注目したい。

ud 'pas 'az wizend <ud> wišōwišn i 'az Tāzīgān 'ō-iz dīwān ud ganj i kišwar mad, hufraward Ādurbād i Ādurfarrōbay i Farroxxādān i hudēnān pēšōbāy 'būd, 'hān pacēn i kustagihā pargandag 'būd, nōg abzār 'az pargandagih 'abāz 'ō +hamāg dīwān 'i-š 'dar 'āburd, 'andar nigerišn ud handāzišn i 'ō weh dēn Abestāg ud Zend ud pōryōtkēšān gōwišn hangōšīdag pairōg i 'az 'hān brāh 'abāz kerd.

そして、国の文庫と宝庫にタージ（アラブ）からおそってきた災厄と混乱ののちに、善教徒（ゾロアストラ教徒）の守教（*pēšōbāy*）であった聖アードゥルバーディ・アードゥルファッローバイィ・ファロクザーダーンは、各地に散在していたかの（*Dēnkard* 書の）写しを、またかさねて、散在状態から、首都の総合文庫にもたらし、考察したり、善教（ゾロアストラ教）のアヴェスターとゼンドならびに先師たちの語録と照合したりして、かの光輝からの反映のごときもの（テキスト）を、ふたたび作成した。

'pad škeft aram ud wizend i 'ō Zarduxšt i Ādurfarrōbayān i hudēnān pēšōbāy 'būd, jast, 'hān-iz dīwān 'ō wišōwišn ud 'hān nibēg 'ō wisistagih ud pargandagih ud az-aš 'ō-iz kahwanīh ud winastagih ud pūdagih mad.

善教徒の守教であったザルドゥクシュティ・アードゥルファッローバヤーンを襲った、おそるべき不安と災厄のために、かの文庫も混乱におちいつてかの（*Dēnkard*）書は散失散乱し、やがて欠損、汚濁、汚穢とまで化してしまった。

ud 'az 'hān 'pas, 'an, Ādurbād i Ēmēdān i hudēnān pēšōbāy, 'az yazdān sōbārišn <ud> dēn mahist ayār-dahišnīh nōg abzār 'pad xwāhišn ud +wizōyišn ud ranj i meh ham nibišt, 'cē 'az 'hān wisāndag ud uzruftag ud sūdāg ud xāg-āmēg dīwān 'abāz windīd.

そして、そののちに、善教徒の守教たる余、アードゥルバーディ・エーメーダーンは、神々の恩をうけ、また（ゾロアストラ）教の最大の助けを蒙って、あらためて、探求し研究し努力をかさねて、これを書きあげた、というのは、その結果、散乱し破壊し閑却され塵にまみれていた文庫を、ふたたび発見したからである。

ud 'ed 'cē 'az 'abāz 'griftagih ud burdagih ud truftagih 'abāz 'aburd <ud> az-aš wiziḏ, madag mow hampursagig xrad ayārih, 'pad 'abāz handāxtārih i 'ō pōryōtkēšan i pēšenīgān gōwišn kerdag Abestāg paidāgih [ud] abzōn i 'az weh dēn dānāgih daragihā padīš arāst, ud ristagēnīd bām-1 i 'az padīrag i 'hān brāh i 'az rōšnīh i bun rōšn. ud 'hammisihā kerd, 'pad weh dēn nimūdārih, 'en i nāmēnīd 'pad stūrih mānāg i 'hān 'wazurg bun Dēnkard 1000 Darag.

奪われ持ち去られ盗まれた状態から取りもどしたところのこれ ('ed 'cē)——そのなかから (<ud> az-aš), マグシュ祭司との対話によってえられた知恵にたすけられてのことであるが、えらび出したわけで、先師たち、すなわち先哲たち、の語録と照合することによって、アヴェスターの啓示を善教からの知識で増補してそれに章をつけ、(それを)光源の光から出る光輝の反射からの一つのかがやきと定義した。要するに、善教の指南にもとづき、かの大原^{げん} Dēnkard (書)に似た規模に因んで、これを「千章 (の書)」と名づけることにした。

ここに取り扱われているのは Dēnkard の歴史であるが、現在 Dēnkard とよびならわしているテキストは、ここでは、最後に記されている「千章 (の書)」(Hazār Darag) のことで、編述者はアードゥルバーディ・エーメーダーン。これにたいし、かれが「大原 Dēnkard」とよんでいるのは、その先稿本で、上来引用した範囲では、この先稿本のイスラム時代の歴史が取り扱われている。

ダーラヤワウシュの存命中に完全に機能を果たしていたものは、中央宮（三門宮——7）とアルダスターナ宮（8）あたりとみられる。クシャヤールシャーのハンディシュ宮は、構造面からは、アルダスターナ宮をそのまま拡大したものとも見ることができるから、その性格や役割りも、おおよそ、見当がつく。とすれば、問題は、いわゆる宝庫と総称されている部分（17, 16＝九十九柱の間, 15＝小百柱の間）の起工年代であろう。大王の居住に考慮を払わない、純然たる宝庫としての建造物が、いずれは、必要となつたろうことは明らかであるが、しかし、その年代推定は筆者当面の論考の範囲外にある問題である。筆者による Ardaštāna の解明が受けいられるならば、これを出発点として、ペルセポリス王宮群の最初期の歴史を、もう一度考えなおしてほしいと思う。このほか、しばらくぶりで古代ペルシ

ア語碑文と取りくんだ筆者には、疑問のいくつかが目につく。本稿でくりかえし取り扱った^(註4) *tačara-*、別稿でのみ取り扱った^(註4) *handiš-*、それに、word-formation の面から論議がつくされているとは思えない、いわゆる「万国の門」*duvrθim visadahyum* など、かれこれ按ずれば、古代ペルシア語かならずしも広い門ではないことを痛感する。ヘロドトスの「歴史」I, 98 によると、メディア王デイオケスのアグバタナ（現ハマダーン）王城にも、王宮と宝蔵があった。王城の構成要素として、宝庫は欠くことのできないものである（上説 p. 16 も参照）。ペルセポリス王宮における最初期の宝蔵・宝庫としてダーラヤワウシュが反復刻銘したタチャラの性格が、ながく埋没していたことは、遺憾というほかはない。筆者は一連の論考によって、スーサの「ダーラヤワウシュのタチャラニハンディシュ（合成）宮」、ペルセポリスの「ダーラヤワウシュのタチャラニアルダスターナ（宝庫）宮」——クシャヤールシャーはこれに父王のハンディシュ宮と追刻している^(註29)——、同じく「クシャヤールシャーのタチャラニハンディシュ（合成）宮」の性格の一端を解明しようと試みたが、なお及ばないものの多々あることをおそれている。

註

- 1) 以下の本稿では、ハカーマニシュ（アケメネス）朝の王名は主格形——それも、古代ペルシア語碑文にみえる形をローマナイズして得られるものを、そのまま片仮名書にする建前をとった。
- 2) R. Ghirshman: *Persia*, translated by S. Gilbert and J. Emmons, London 1964, p. 154 以下。図版 I も主として同書によった。
- 3) アパダーナとよばれるアルタクシャサ II 世の王宮（スーサおよびハマダーン）と構造が似ているために、この建物も、仮りに、アパダーナと通称されているにすぎない。また、よみかたも *apadāna-* か *ap(p)adan-* か、不明。近世ペルシア語では *eivān* “sofa; portico, open gallery, verandah, balcony; palace” としてのこっている。
- 4) *tačara-* と *handiš-* (*hadiš-* でなしに) については、拙稿「自画自賛——古代ペルシアの場合——」（『西南アジア研究』No. 22, 京都 1969）で取り扱ったが、*tačara-* については、それを本稿でも繰りかえすことになった。
- 5) Darius Susa 碑文 d に「余はダーラヤワウシュ、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、この世界の王、ウィシュタースパの子、ハカーマニシュの裔。王ダーラヤワウシュは告げる：アウラマズダーの御意によって余はこのタチャラを (*dačaram*) 造営した。」とある。
- 6) Xerxes Persepolis 碑文 j ——「余はクシャヤールシャー、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、この世界の王、王ダーラヤワウシュの子、ハカーマニシュの裔。王クシャヤールシャーは告げる：このタチャラを余は造営した。」アッカド語版では「このタチャラを」のかわりに「この家、タチャラを」とあって、*tačara-* がなにか術語的な意味を含んでいることを思わせる。
- 7) Artaxšassa II Susa 碑文 a ——「このアパダーナは余の高祖ダーラヤワウシュ（I 世）が造営したが、のち、余の祖父アルタクシャサ（I 世）のとき、焼失した。アウラマズダー、アナーヒターおよびミスラの御意によって、このアパダーナを余は造営した。」(II. 3-5)
- 8) Chicago 1953. ダーラヤワウシュのタチャラ宮の各室に付した番号はシュミットの解説に従ったもの。

- 9) Darius Persepolis 碑文 a ——「このタチャラを造営したダーラヤワウシュ、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、ウィシュタースパの子、ハカーマニシュの裔。」なお「その他」とあるのは、例えば本稿 p. 15 に記す2碑文のごときもの（そのほかにもあるが）。
- 10) 正面からの景観は、並河萬里『ダリウスの遺産』、東京1970、図版8にみられる。左端（写真にむかって）最前方には柱廊（No. 1）西壁のニッチが見える。そのうしろの用門は柱廊（No. 1）から、同ニッチ背後の室（No. 3）に通じるもの。この用門と対称をなす東壁の用門は、右端最前方にみえる。その用門の前にも、上記ニッチと対称をなすニッチがあるが、写真にははいっていない。
- 11) E. F. Schmidt の上掲書、Plate 131 A 参照。
- 12) *Voyage du Chevalier Chardin en Perse, et autres Lieux de l'Orient, enrichis d'un grand Nombre de belles Figures en Taille-Douce, représentant les antiquités et les choses remarquables du pays*, Amsterdam 1718——しかし、本稿の筆者は図版 LXIX は未見。
- 13) *Amœnitatum Exoticarum Politico-Physico-Medicarum Fasciculi V, Quibus continentur Variæ Relationes, Observationes & Descriptiones Asiæ, multâ attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectæ, ab Autore Engelberto Kæmpfere D, Lemgovix 1712*, p. 347.
- 14) *Cornelis de Bruins Reizen over Moskovie, door Persie en Indie: verrykt met driehondert kunstplaten, vertoonende de beroemste lantschappen en steden, ook de byzondere dragten, beesten, gewassen en platen...*, Amsterdam 1714, 図版134。
- 15) 例えば O. P. Vištāspa: Elam. *mi-iš-da-āš-ba* や É. Benveniste: *Titres et noms propres en iranien ancien*, Paris 1966, p. 77 (Elam. *Aksušda*=O. P. or O. Ir. *-zušta-*); p. 84 (*Irdasušda*=*ṛta-zušta-*); p. 91 (*Rašda*=*rāšta-*, *Rašdama*=*rāstatama-*); p. 92 (*Ratešda*=*raṭai-štā-*, *Šarišda*=*sārišta-*); p. 96 (*Yašda*=*yašta-*) では Elam. *-šd-* が O. P. *-št-* を示し、同書 p. 83 (*Harmišda*=*ara-mižda-*) では Elam. *-šd-* が O. P. *-žd-* を示す。
- 16) É. Benveniste の上掲書 p. 77 (Elam. *Akmašdana*=O. P. *haxma-stāna-*), p. 81 (*Battišdana*=*patistāna-*), p. 85 (*Irtāšduna*=*Ἀρτυστόνη*), p. 88 (*Mipušda*=*vi-busta-*) のごとき。
- 17) ただし、W. Brandenstein (Oct. 25, 1898–Dec. 1, 1968) との共著。Graz 大学印欧言語学教授だったブランデンシュタインは *Einleitung*, *Lautlehre*, *Wortbildung* などを分担執筆した。
- 18) *R̥gveda* VIII 46₂₃。
- 19) *R̥gveda* VI 3₂。
- 20) *Grundriss der akkadischen Grammatik*, Roma 1953, p. 63, § 55, q, 32 a) *puruss* の項参照。p. 63, § 55, q には *kanāku* “siegeln”: *kunukkum* “Siegel”, 同ページ § 55, q; p. 52, § 50, d には *HBL* “Unrecht tun”: *hubullum* “Schuld- od. Zins-verpflichtung” がみえる。
- 21) 並河萬里『上掲書』図版15参照。
- 22) DkD.=*Denkard, A Pahlavi Text—Facsimile edition of the Manuscript B of the K. R. Cama Oriental Institute Bombay* edited by M. J. Dresden, Wiesbaden 1966. つぎにかかげる翻字もこの版によった。+印は筆者による改読、〈 〉は同じく補訂を示す。この句も細部については異説もあるが、本稿の主要課題には関係がないので、それには言及しなかった。
- 23) DkM.=*The complete text of the Pahlavi Dinkard* published...under the supervision of D. M. Madan, I–II, Bombay 1911.
- 24) 例えば J. Duchesne-Guillemin: *La religion de l'Iran ancien*, Paris 1962, p. 281 や G. Widengren: *Die Religionen Irans*, Stuttgart 1965, p. 244.
- 25) 例えば H. S. Nyberg: *Die Religionen des alten Iran*, deutsch von H. H. Schaefer, Leipzig 1938, p. 418 では „...er unterfertigte eine Verordnung (?), man solle die ganze arische Bevöl-

kerung zur Annahme der mazdayasnischen Religion veranlassen.“ とある。同教授の立場にたって原文を直訳すれば「全アリアン地域をしてマズダヤスナ教の上に立脚させよ、との命を布告した(?)」ということになろう。この見解は、同教授の著 *A Manual of Pahlavi*, I, Wiesbaden 1964, Index p. 143 にも、そのまま踏襲されている。問題の語が *Aryastān* とよまれているからである。また、H. W. Bailey の上掲書 p. 219 では *hamāk argastān apar dēn mādēs* とよまれ、訳は付されていない。R. C. Zaehner: *Zurvan. A Zoroastrian Dilemma*, Oxford 1955 は *ut ēstēnitan i hamāk argastān apar dēn mādēs ō uskār kart* (p. 32) とよんで “and he examined (the possibility) of bringing all systems (?) into line with the Mazdayasnian Religion.” (p. 8) と訳し、*argastān* (<*arg-*>) は “trouble, righteous effort” の意味なるも他所には見当たらない (p. 34) と註している。「すべての体系 (*hamāk argastān*) をゾロアストラ教のうえに立たせること (*ēstēnitan...apar dēn mādēs*)」と解し、それを「……ゾ教と調和させること」というふうに理解するのであるが、筆者には、まったく、理解しがたい。

- 26) *ard(a) > āl* をみせているものは Arabo-Persian *ālat*, pl. *ālāt*.
- 27) この王朝(?) 名の呼びかたについては異論もある。Paul Naster: *Note d'Épigraphie monétaire de Perside: fratakara, frataraka ou fratadāra?* (*Iranica Antiqua*, Vol. VIII, Leiden 1968所収), p. 74 ff. 参照。
- 28) オストラコン No. 925, dated 50 B. C. に *gznb̄r=gaznbar* がみえる。Sogd. *γazn* 参照。
- 29) p. 14 参照。

On the function of Darius' Palace (*tacara-*) at Persepolis

by Gikyō ITŌ

I have treated of the two words *tačara-* and *ardastāna-*. As for *tačara-*, it may be derived from *tak-* “to run, to flow”. Morphologically *tačara-* is composed of the present stem *tača-* and the suffix *-ra*, hence *tačara-* implies as nomen agentis “running out, flowing out (of what may be regarded as main building)”, “detached palace”. When the palace of Darius is called *tačara-*, it is because of its being regarded as a building detached from the Central Palace (Herzfeld's so-called Tripylon) or the Apadāna. Therefore, Xerxes' Palace should be called Xerxes' *tačara-*: *Handiš*. That the *Handiš* is a *tačara-*, most probably, of the Tripylon or of the Apadāna can be confirmed by the tori with the inscription Xerxes' Persepolis j found filling the several rooms of the western wing of the so-called Harem. Of the same king, another *tačara-* was discovered below the Persepolis Platform to the south. No wonder that New Persian *tazar* means “summer house” because *tazar* is a detached house for summer residence.

In the Darius' *tačara-*, eighteen times is repeated the trilingual inscription Dar Persepolis c (cf. p. 6). The Old Persian text says “*ardastāna-* made in (or for) the House of King Darius”. The reading *ardastāna-* may be justified by the Elamite *har-da-iš-da-na*, because Elam. *-šd-* can represent also O. P. *-st-*. Generally O. P. *ardastāna-* has been looked upon as technical term, meaning “Halbstand, vielleicht Fensterkrönung od. -sims” (p. 7: Bartholomae), “*ὀρθοστάτη*” (*ardastāna-* p. 7: Herzfeld), “frame, corner-pillar” (*ardastāna-*, p. 7: Herzfeld), “place of light, i. e. window-frame or -cornice” (p. 8: Kent), “threshold, sill” (p. 8: Henning), or “Halb-Säulen-Stand” (**arda-stūnā-stāna->ardastāna-*, p. 8: Wüst), according to the various treatment of *arda-*. I have rejected all of the interpretations and connected *arda-* with *ard-* (*arəd-*): Ind. *ṛdh-* “to become large, to prosper, to become rich”, hence *ardastāna-* means “Treasure-place, Treasury”. Ir. *ard-* and its derivatives attested in Av. may account for the fact that Ir. *ard-* is intransitive, not transitive. Y. 50₁₁ (p. 9): “May the Creator of the world become rich and prosperous (*arədat*) in order to realize (*haiθyāvarəštəm*), through Vohu Manah, what is the foremost in His desire!” Yt. 10₁₂₀ (p. 10): “Mithra (is) prosperous (*arədwā*) among all of the righteous Mazdayasnians.” Yt. 12₁₇ (p. 10): “That tree ... which cures good, cures abundant (i. e. many diseases, *arədwō.biš*) that is called by the name of *Višpō.biš* (“which cures all”, cf. *ahūm.biš* “curing the life”). Yt. 13₁₄₂ (p. 10): *Ṛədat.fədrī-* (mother of *Astvat.ərəta-*), fem. of **arədat.pitar-* “whose father is thriving” (so also its Pahl. translation Gōbāg-

pid). My interpretation of *ardastāna*- “treasury” may be justified by the Akkad. version *kuburrē*. *kuburrē* or *kuburru* is a *puruss* type noun to *KBR* or *kabārum* “to become large” just like *kunukkum* “Siegel” to *kanāku* “siegeln” and *hubullum* “Schuld- od. Zins-verpflichtung” to *HBL* “Unrecht tun”. In his *Altpers. Inschriften*, p. 76, Herzfeld has cited Clay: *Babyl. Rec.* II, n. 30 and 44 apud Thureau-Dangin: *Alle andren gottheiten treten in den tempel ein, aber Papsukkal dans le kuburru de la porte du sanctuaire s'arrêtera* and regarded the *kuburru* as *ὀροσδάτη*. But the *kuburru* is nothing other than “treasury” (*ardastāna*-).

My linguistic argument seems to be cogent from the view-point of architecture. In spite of the fact that the palace (30 m×40 m) is far more smaller than the *Apa-dāna* (60×60) or the large 100 Column Hall (70×70), it is divided into as many as 17 sections with exception of the portico. This very fact may be sufficient for revealing the whole structure to be treasury which is constituted in its turn of many small treasuries behind the niches inscribed. Besides, a file of men relieved on both sides of the parapets of the southern stairway as well as on the northern face of it can be regarded as servants transferring the tributes into the Treasury. That the building was called *Ardastāna* or Treasury may be inferred from the four window-frames inscribed on both sides. The north-eastern small hall is regarded as king's private room in the light of the reliefs on the jambs of doorways leading to this room. But the hall can be supposed to be a small treasury by the niche. Two elements, seemingly contrary to each other, may easily be reconciled, considering the fact that in *garō dāmāna*- not only keeps Ahura Mazdā His residence but also are deposited His *išti*- “properties” as well as the merits and demerits of mankind.

Lastly I have cited the *Dēnkard* passages: (a) ed. Dresden 511₁₃₋₂₀=ed. Madan 412₁₇—413₂ and (b) Dresden 515₅₋₂₁=Madan 406₁₀—407₉; see pp. 14 f. and 17 f. The text (a) says that Šābuhr I investigated the establishment of a Whole Treasury (*hamāg ardestān*) concerning the Mazdayasnian Religion. The script read here *ardestān* can allow the reading *ālestān* with the Persian treatment of *āl*-<*ard*- (cf. N. P. *ālat*, pl. *ālāt*). The former reading has been preferred only because *ardastāna*-, regarded as a well-nigh proper name, must have been relieved of the Persian treatment. But it is insignificant which of the two readings may be taken. The Middle Persian word *ardestān* or *ālestān* “treasury” seems to have been replaced by *ganza*->*ganj*. The word *ardestān* reminds us of the city name *Ardestān*, N. W. of Nā'in, but no Arabo-Persian historian or geographer has referred to it in connection with Šābuhr I. In the text (b), the Whole Library of the Capital (*+hamāg dīwān 'i-š 'dar*) is referred to as a depository of the Large Original *Dēnkard*. The parallelism between *hamāg ardestān* and *+hamāg dīwān* seems to vindicate my interpretation of *ardestān*<O. P. *ardastāna*- “treasury”.